

Information

- **車の事故**
任意保険に加入しましょう
- **学研災・学研賠**
万一の事故にそなえ、必ず学研災・学研賠に加入しましょう
- **年金**
将来のため国民年金に加入しましょう
- **環境**
ゴミ捨ては決まった日時・場所に分別して捨てましょう
- **火災**
普段から火災予防に心がけましょう
- **悪徳商法**
「資格取得商法(電話勧誘販売)」等に気を付けましょう
- **相談**
困ったことがありましたら学生生活支援課「なんでも相談員」に相談しましょう

新大広報 Back Number

▼▼▼ **150号** ▼▼▼
〈あさひまち物語〉

▼▼▼ **151号** ▼▼▼
〈新大での思い……〉

▼▼▼ **152号** ▼▼▼
〈新生活応援〉

▼▼▼ **153号** ▼▼▼
〈Open Campus〉

バックナンバーが欲しい方は、学務部学生生活支援課まで受け取りに来て下さい。新大広報のバックナンバーは、

<http://ksws1.ge.niigata-u.ac.jp/kouhou/index.htm>

でも見ることができます。大学の魅力を先輩たちが語っています。ぜひ、どうぞ。

編集スタッフ

今回の新大広報は地域との繋がりがテーマとなっています。しかし現状を見る限り、春の内野小学校でのお花見をはじめ迷惑駐車やゴミ捨ての問題など、周辺地域と大学との間には溝が出来ているように思えます。大学生として地域の一員である事には変わりありません。「大学生の常識は地域の非常識」…そう見られない事を願っています。

● 椿 智彦(経済学部4年)

コミュニティマーケットに実行委員として関わりました。当日の会場内に漂うなんとも言えない雰囲気…。様々な想いが交わって、年齢もジャンルも異なる参加者の間に“見えない何か”がムクムクッと動いていた様な気がします。今回の取材を通じ、それぞれの活動に対するみなさんの願いや想いを改めて感じました。

● 樋山和恵(農学部2年)

新潟大学広報誌



学生編集委員

募集!!

新大広報の編集委員は
就職活動に有効です!!

■問い合わせ先：学生生活支援課(262-6089)
または各学部の広報委員まで。

編集後記



今回の新大広報は、新大祭をキーに新大生の課外活動をテーマに取材いたしました。7.13水害、中越震災のボランティア活動だけでなく、日頃からあらゆるところで地域活動を行っていることを知ることができました。また、新大生の柔軟な身のこなしが、新大祭でECO学園祭を生み、コミュニティマーケットを開催したと感じました。

本号の制作にあたって、学生編集員が取材に、編集に大活躍していただきました。感謝申し上げます。次号もご協力お願いいたします。(編集委員長 寺田員人)



4月に新大に着任し、右も左も分からないままに本誌の編集に参加いたしました。取材などに同行させていただき、学生の皆さんから興味深い話を聞くことができました。ありがとうございました。

今回の特集で取り上げた活動に限らず、学生のうちにいろいろな体験をすることは、その後の人生において大きな宝となることでしょう。学生の皆さんはぜひ、今のうちに、今しかできないことにチャレンジしてみてください。(編集委員 岡田昌浩)



今回の企画は大学祭とは何だろうという素朴な疑問から始まりました。そして、これを支え、盛り上げるエネルギーの大きさと45回という年輪の重さに感動しています。その発想は自由自在に形を変え、のびのびと広がり、大学という枠をとうに乗り越えていることに気付きました。今回これを読む学生と教職員の方々に私達が実感したこの驚きと期待をお伝えできたらうれしいです。経験豊かな委員とスタッフに支えられて無事任務完了です。(編集委員 柳喜重郎)



平成16年の新潟県は水害や地震といった大きな災害に見舞われましたが、力を合わせてその災害に立ち向かおうとする活発な動きが多く見られました。特に災害復旧のボランティアにはたくさんの本学学生の活躍もあり、大変頼もしく感じました。今号では学生たちの様々な取り組みについて紹介されていますが、学生達のエネルギーが伝わってくる気がするこの頃です。(編集委員 新保一成)

広報委員会第1部会

● 部会長・編集委員長	寺田 員人(医歯学総合病院)	Tel 227-2975	tera@dent
● 委員	石坂 妙子(教育人間科学部)	Tel 262-7116	ishizaka@ed
	岡田 昌浩(法学部)	Tel 262-6545	okada@jura
	柳 喜重郎(経済学部)	Tel 262-7660	yanagi@econ
	徳江 郁雄(理学部)	Tel 262-6112	itok-pc@chem.sc
	牛木 辰男(医学部医学科)	Tel 227-2058	t-ushiki@med
	川瀬 知之(歯学部)	Tel 227-2927	kawase@dent
	新保 一成(大学院自然科学研究科)	Tel 262-7543	kshinbo@eng
	崎村 建司(脳研究所)	Tel 227-0619	sakimura@bri
	岩本 義男(学務部長)	Tel 262-6080	iwamotoy@adm

● 事務局(学務部) Tel 262-6089 Fax 262-7516 korisi@adm.
(E-mailのアドレスは、niigata-u.ac.jpの標記を省略しています。)

● 新潟大学ホームページ <http://www.niigata-u.ac.jp/>

この広報は再生紙を使用しています。



no.154 2005_1月号

編集 発行

新潟大学広報委員会
新潟大学学務部

印刷

株式会社 博進堂



新潟大学広報誌
Niigata University
Campus Magazine

新大広報

Campus forum

no.154 2005_1月号

可能性への挑戦

～地域とのつながりを求めて～



可能性への挑戦

～地域とのつながりを求めて～



2004新大祭のテーマは「宴」。
「コミュニティマーケット in 新潟大学」で見つける新しいコミュニケーションのカタチ。
環境にやさしい学園祭の実現を目指した「新潟大学ECO学園祭」。
多様な人々が混在する環境の中で個々を尊重して共存していきたいと願う。

2004年第45回新大祭常任委員会

Interview



2004年第45回新大祭常任委員長
松井昭洋さん
(人文学部3年)



第45回新大祭のパンフレットの表紙。構成から撮影に至るまで全て編集による手づくり。

2004年10月30、31日の両日、新潟大学五十嵐キャンパスにおいて第45回新大祭が開催された。
主催の新大祭常任委員会は総勢125名で、準備は学生会館の談話室にて9月後半から連日進められた。
第45回新大祭常任委員長の松井昭洋さん(人文学部3年)に準備の合間を縫ってお話を伺った。

多くの方々に出会い、貴重な体験をしました。

— 今回の新大祭で委員長が勧める楽しみ方を教えてください。

レミオロメンのライブと松木安太郎さんの講演会は確実にオススメです。レミオロメンはめったに野外ライブはやりません。また、講演会は毎年立見が出るほどです。

それと、前回も人気があった体育館で行われる異種格闘技。これは、学内の格闘技系サークルや部活が競い合います。

日本酒同好会による出店も魅力です。とても安い価格で新潟を中心に全国各地のいろいろな日本酒が飲めます。毎年、アルコールの取扱いに対する注意が厳しくなってきましたので、酒を出さない大学が増えました。私たちは、酒を扱う時間帯を調整することで何とかやってきましたが、次回以降はどうか分かりません。その意味からもオススメです。

— 新大祭は地域の人たちの協力によって行われていると聞きました。どのような協力がありますか。また、他大学との交流はありますか。

地域からの協力で大きいのはテントの貸出しですね。新潟市内の学校で使っているものをこちらでトラックを用意して借りてきました。

地域のお店の方から出店のお申し出がありました。新大祭では営業できないためお断りし

ました。しかし、多数の企業から協賛金というカタチで支援をいただきました。また、新潟大学周辺や古町、万代シティのお店をまわり、約800枚のポスターを貼って頂きました。

今は他の大学でも学園祭の時期ですが、積極的に交流することは考えていません。しかし、本学内のリサイクル弁当箱会や大学生協が他大学と連携してECO学園祭(9-10頁参照)を企画、推進しています。

— 常任委員会での活動を通して学んだことはありますか。

こういった取材も含めて、大学内外のとても多くの方と知り合うことができました。それぞれの企画をしている方々やマスコミ(FM新潟の担当さん)の方々。そして、何より地域の方々とのつながり…。新大祭の活動を通して多くの方々との出会いをいただくことで貴重な体験をしました。

— 最後に、キャンパスフォーラムの読者の皆さんに一言。

我々も広報活動に力を入れていますが、新大祭は連休に開催されるので学生の中に参加しない方がたくさんいます。まずは1回、是非参加して欲しいですね。

<新大祭常任委員会> <http://www.shindaisai.net/>
2004年第45回新大祭常任委員会 委員長 松井昭洋(人文学部3年)
2005年第46回新大祭常任委員会 委員長 石田真帆(経済学部2年)



市内の学校から借りてきた
テントの幌は衛生面を考慮
し、水拭きする。



協賛をいただいた企業
のロゴ作成。当日はス
テージに貼る。



ステージ建設風景。費用節約のため、学生による手づくり。



当日の総合案内所。
来場者の窓口となる。



新大祭2日目。お天気にも恵まれて
模擬店も賑わった。

新大祭常任委員会組織

幹部

- 委員長(1名)
- 副委員長(2名)

部局..... 学園祭を運営するための組織

- 総務部(21名) 参加団体(模擬店・一般企画)の管理、電気・借用物品の管理
- 財務部(8名) 学園祭運営のための資金管理
- 衛生部(12名) 模擬店の衛生管理、ゴミの処理、ECO関連の仕事
- 企画促進部(12名) 一般企画や模擬店をサポートする企画の提案
- 渉外部(16名) 協賛企業との交渉、ステージの建設、資材関連の仕事
- 情報宣伝部(23名) テレビ・ラジオ等を利用した広報活動
- 編集部(11名) パンフレットやポスターの作成

企画..... 学園祭を盛り上げるためのステージ企画

- コンサート 『レミオロメン』を招いてのプロコンサート
- プリンセスコンテスト 学生の中でプリンセスを決める企画
- 硬派 『松木安太郎氏』を招いての講演会
- 軟派 お笑い企画

総勢
125名

新大祭を終えて

直前に中越地震が発生しましたが、
プログラムは無事にこなせました。

振り返ってみて良かったと思えることは、中越地震があったにもかかわらずアーティストと講演会講師の松木安太郎さんが予定通り来られて、プログラムの内容を無事にこなせたということです。反省点としては会場の管理面ですね。広場で前夜祭や打上げでバーベキューなどをした人が大勢いました。その辺を次回の課題にしたいと思います。以前、酒を飲んだ人が窓ガラスを割るという事件がありましたので.....。

地域との関係を特に意識して取り組んではいなかったのですが、直前に震災があったので、急遽テーマを変えて被災地を支援するために、新大祭を挙げて募金活動を行うという形にしました。震災ボランティア新大本部も立ち上がり、地域との関わりというのは十分果たせたかなと思っています。

次期委員長には、人の上に立つ者として最低のマナーを身に付けることと、あまり怒らないということを伝えたいですね。

(松井昭洋)

コミュニティマーケット in 新潟大学

新大祭にあわせて、第一食堂にて「コミュニティマーケットin新潟大学」が開催されました。地域やジャンルを問わず、様々な活動を実践している学生団体と一般団体が出展し、大学生と市民活動を行う人々・住民の出会いと交流の場が生まれていました。

① 10:00~10:30 開会・挨拶・プログラム全体説明

コミュニティマーケットってなあに？

コミュニティマーケットは、名古屋で始まりました。地域づくりや市民・NPO活動と住民との接点をどうしたら作れるのかという疑問が出発点でした。

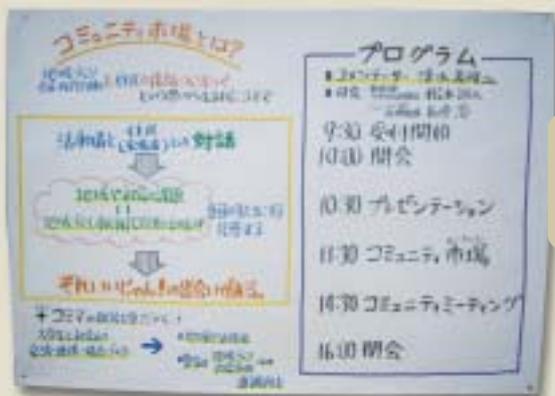
住民と市民・NPO活動団体とが交流する場を設け、活動・事業に対する賛同や支援を行うなどの様々な出会いの機会を提供します。

活動・ジャンルや地域・年齢という枠を越えた多様な方々が集い、課題が現す地域や社会の弱さからつながることで自分自身にとっての市民・NPO活動に出会うのがコミュニティマーケットです。



進行を務める実行委員
松本誠太さん

② 10:30~11:30 アピールタイム／出展団体によるPR(各団体3分)



コミマ in 新大の主旨は、大学生と社会人の交流・連携・接点づくりです。



出展者は、それぞれのスタイルで活動を紹介します。



③ 11:30～14:00

コミュニティマーケット開場

学生と社会人の垣根を越えた
つながりのマーケット。
来場者は各展示ブースを自由
に回って出展者と対話。



学生と社会人が交互に
ブースを設けます。



興味をもった来場者が出展ブースに
行き、交流が生まれます。



出展者は思い思いのしつらえで、
来場者を招きます。



活動に共感し、話は盛り上がります。

仕掛人にインタビュー「新大でコミュニティマーケットをやろうと思った理由」

コミュニティマーケットを新潟大学で開催したのは、ニートやフリーターの増加、社会就労等の社会問題は、学生と企業や社会の接点が閉ざされていることに問題があるのではないかと思ったのがきっかけでした。そこで、学生と社会の接点をつくる機会として、コミュニティマーケットを位置付けました。

社会には様々な入口があって、接点は作ろうと思えばいくらでも作れるのですが、学生から見えている部分は非常に狭い部分であり、そこをまず広げたいと考えました。

また、接点を自らつくるためには、待っているだけでなく、自分で探すという視点が必要です。自分は何がしたい、将来はこうなりたいという前へ向く力が弱いなど感じ、何か仕掛けられないかなと考えていて、今回の開催になりました。



実行委員 長崎忍さん

4 14:00~15:30

コミュニティマーケット・ミーティング

出展者と来場者との間に生まれたつながりの発表。
感想・意見交換。安心と感心の共有。



学生参加団体は、一般参加団体との交流を通して刺激を受けた様です。



来場者からの質問や意見で話が深まります。



感想や意見は、大きな紙に書き全体での共有を図ります。



互いに共鳴し合う場が生まれます。

出展団体の感想

- ・若者とのふれあいが楽しかった。学生と学習会ができそう。
- ・農業関係の他団体とコラボレーションして何かできそう。
- ・他団体の会議の仕方を、自分たちも参考にしてみたい。
- ・他団体との交流の大切さがわかった。いろいろな考え方に、刺激を受けた。
- ・いろいろな活動と出会えたので、ネットワーク化を図りたい。
- ・次につながるつながりが生まれた。
- ・お話を聞き、興味をもったので、他団体の活動に関わることにした。
- ・会員を1名ゲットした。
- ・名前を売ることができた。
- ・中越地震の震災ボランティアネットワークが大学間で生まれた。
- ・新大の学生の活動に勇気付けられた。

コミュニティマーケット
in 新潟大学

実行委員

長崎 忍
(財団法人ニューにいがた振興機構)
樋山 和恵(新潟大学)
物江 智子(新潟大学)
吉岡真貴子(新潟大学)
新津 厚子(国際情報大学)
五十嵐美紀(国際情報大学)
荻野 真未(国際情報大学)
村山 貴規(新潟大学)
松本 誠太(新潟大学)

コミュニティマーケット学外出展団体

CAP・にいがた



代表：石附幸子
〒951-8127 新潟市関屋下川原2-18
TEL/FAX 025-265-1617
メール cap.n@violin.ocn.ne.jp
<http://www7.ocn.ne.jp/cap.n/>
子どもの人権が尊重される社会の形成を目指す。

特定非営利活動法人 地域たすけあいネットワーク



代表：吉川 静
〒955-0071 三条市本町6-3-76
TEL 0256-34-2448
FAX 0256-34-2950
メール tasukeai@soho-net.ne.jp
困ったときはお互いさま、できることをできる時間で支えあう、住民参加型システム。

新潟医療福祉大学 レクア.コム部



代表：渡辺英輔
〒950-3198 新潟市島見町1398
新潟医療福祉大学社会福祉学科
講師丸田秋男研究室
TEL/FAX 025-257-4473
メール maruta@nuhw.ac.jp
障害の有無や年齢の差にかかわらず一緒に楽しむ。

農業生産法人(有)朝日池総合農場



代表：平沢栄一
〒949-3135 上越市大潟区内雁子252-1
TEL 025-534-5955
FAX 025-534-5956
メール asahiike@amber.plala.or.jp
<http://www.asahiike.com/>
新鮮で美味しい農産物を、みんなに直接食べてもらいたい。

NPO法人 女のスペース・にいがた



代表：朝倉安都子
〒951-8127 新潟市関屋下川原2-18
TEL 025-231-3012
FAX 025-231-3010
女性の抱える問題の相談にのり、解決への道をさぐる。

まきどき村(NPO法人 虹のおと)



代表：西田卓司
〒953-0041 西蒲原郡巻町甲2407-12
TEL/FAX 0256-73-1237
メール makidoki@makinet.jp
<http://www.makinet.jp/makidoki/>
人と自然のつながり、地域社会の人と人のつながり、それらをつなぎ直していく。

n-VIC 新潟ボランティア情報センター



代表：新津厚子
〒950-2264 新潟市みずき野3-1-1
新潟国際情報大学内
メール nvic@plum.freemail.ne.jp
<http://www.nuis.ac.jp/h.sasaki/ngo/>
広範囲にわたるボランティア活動参加、取材、情報提供。

佐渡金銀山友の会



代表：弾正俊一
〒952-1542 佐渡市相川塩屋町
佐渡市役所相川支所 佐渡金銀山室内
TEL 0259-74-3115
佐渡金銀山がもたらした遺産を見直し、佐渡のよさを発信して島内外で交流を広げる。

特定非営利活動法人 まちづくり学校



代表：小嶋弘一
〒950-0994 新潟市上所1-12-7
TEL/FAX 025-241-3722
メール machi@onlyone.ne.jp
<http://www.machi.onlyone.ne.jp/>
地域おこし、星おこしのための人材を育成する。

とよさか 田んぼの学校



代表：宮尾浩史
〒950-3334 豊栄市大月
田んぼを「学びの場」「遊びの場」「楽しむの場」として活用する。
農と自然のつながりについて考え、自然を生かした地域の発展に寄与する。



「新発田広域虹色フェスタ」。これでゴミが減るんだ！と驚き楽しみながらはがしてくれました。



これがうわさのリサイクル容器。食べて、はがして、リサイクル。



「古町どんどん」。ホテルイタリア軒のブースでも使われました。地域の大イベントへも着々と進出。

INTERVIEW



「毎週木曜日生協第一食堂で活動中！環境に熱い人、熱くない人も、大・歓・迎」
左から、大橋香さん（法学部1年）、松本誠太さん（大学院自然研1年）、栗野諭さん（大学院自然研1年）

新潟大学生協

リサイクル 弁当箱会

夢はイベントごみを総括して プロデュースすること！

この会はリサイクル容器の普及と回収率アップを目的に2000年10月に立ち上がりました。リサイクル容器って知ってます？リサイクル容器って食べ終わった後に表面のフィルムをはがすことによって、容器を洗わずにリサイクルできるすぐれものなんです。他大学でもこの容器は使われているのですが、他大学と比べると圧倒的に新大の回収率は高いんです。でも、単にリサイクル容器を普及させようというわけではなくて、これを使ってもらって環境問題について少しでも考えてもらいたい。やっぱり基本的には新大生に環境に対する意識を持ってもらうという活動をしていきたいですね。

これまでリサイクル容器を通してイベントごみを減らそうと、いくつかの県内イベントで実際に容器を使ってもらうなどの試みを行ってきました。なので今回のECO学園祭は特に思い入れが強いんです。これをモデルケースにして、他のイベントにも転用できないかなと考えています。

また、ECO学園祭と同時にコミュニティマーケットも開催しました。昨年3月に行われたコミマに私たちが唯一の学生団体として参加したとき、これをもっと他の学生にも知ってもらいたいと思ったんです。コミマを通して学生と社会人のつながりができればと考えました。実際にやってみて、災害ボランティアに関する熱い議論が交わされるなど出展者同士のつながりはうまくできたかなと思います。

今後は他大学とつながりを持って、それぞれECO学園祭のように煙まで面倒を見られるような学祭を広げていけたらいいなと考えています。これは夢ですが、イベントごみを総括してプロデュースできるリサ弁のNPOバージョンみたいなものを作れたらいいなとおぼろげながら考えています。

代表者：西淵智希（人文学部3年）

E-mail: recycle_lunchbox@hotmail.com
<http://niji.coop.niigata-u.ac.jp>

新潟大学環境系サークル
ひまわり卒業生から物品を回収して
4月にリユース市を行います。

「ひまわり」は2001年の9月に発足しました。僕が入会したのは2002年の4月。サークル勧誘していた代表の人に見せられた『環境について考えている人・大学で何か活動したい人を募集中』というビラがきっかけになりました。

一番印象に残っている活動は、現在もサークルの中で目玉として行っているリユース市です。僕が1年の12月に自分で企画したイベントで、仲間と一緒にリヤカーを引き、物品を集めたことが思い出に残っています。リユース市は開催が4月で物品回収が2月と3月です。卒業生に「モノをください」ということと、新入生と在校生には「買いにきてね」ということがポイントです。それと、ただ売るだけじゃなくて「今まで先輩が4年間使ってこれだけきれいにしてきたんだから、大事にして使ってください。」ということです。これがリユース市の目的なので大いにアピールしたいですね。

伝えたいことは、学生一人ひとりに環境を意識してほしいということです。例えば自分の箸を携帯したりゴミ捨ての曜日をきちんと守るということです。当たり前のことですが、今までできなかったことをちょっと気にかけてくれると、環境や地域が良くなってくんじゃないかな。そんな些細なことに気づいて、もうちょっと突っ込んで本でも読んでみようかなとか、イベントに参加してみようかなとか。さらに良くなってくれたらいいと思います。

代表者：鈴木昌俊（理学部3年）
<http://www.geocities.co.jp/NatureLand/2212/>



週1回のミーティング。でも忙しくなるともっと集まります。



コミュニティマーケットでのブース展示。来場者に「ひまわり」をアピール



新大祭でのゴミステーション管理。来場者の理解は年々ましてくれています！

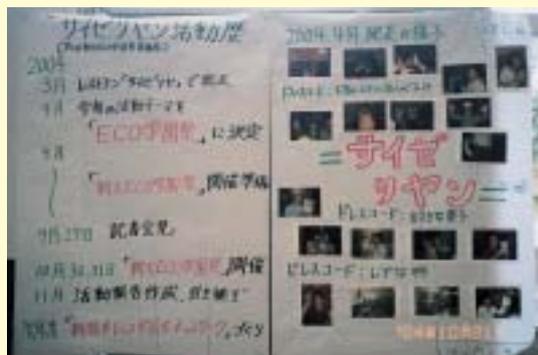
INTERVIEW



「これからは後輩に託して僕は隠居します」と語る鈴木昌俊さん（理学部3年）



サイゼリヤン発足時の様子。



毎回ドレスコードを決めて、楽しい会議にしています。

INTERVIEW



「今後も学園祭のエコ化を継続していきます」と語る
村山貴規さん（農学部4年）

サイゼリヤン

（新潟大学ECO学園祭事務局）

チームエコのプロデューサーとの 出逢いがきっかけで結成しました。

サイゼリヤンを立ち上げたのは、NT21のチームエコプロデューサー（1）との出逢いがきっかけでした。プロデューサーと市民活動で共通の問題やこれからできることの話をしました。それで、環境活動をしている学生を集めて話をする事になり、2004年3月16日にレストラン「サイゼリヤ」に集まりました。

議論が白熱して、今回の新大祭でECO学園祭をやってみようということになり、サイゼリヤン発足につながりました。サイゼリヤンは、そのときに集まった「新潟大学リサイクル弁当箱会」と「環境系サークルひまわり」とプロデューサーと自分で構成されています。

合意形成が難しく、企画書を作成するのに時間がかかり、形になったのが6月でした。その後、新大祭実行委員会環境衛生担当の方にもメンバーに入ってもらい、常任委員会との橋渡し役になってもらいました。新大祭とECO学園祭は独立して実施し、常任委員会とは持ちつ持たれつの関係で行うことになりました。

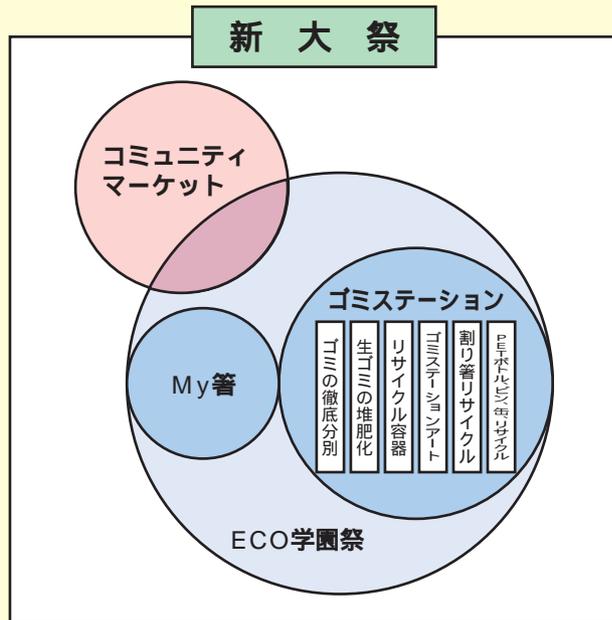
実際に働きかける対象は、学園祭の模擬店です。まず、模擬店の出店者にアンケート調査をしました。集計結果、エコ化することにほとんどが賛成でした。ですが、障害は、環境に特化するとコストがかかるので、それをどう解消していけばいいかということでした。

コミマには、準備段階から関わり、会議でボラバイト掲示板（2）を提案しました。もともと、大学内にあるバイト掲示板に併設してボランティア掲示板やボラバイト掲示板というのを設置したらいいんじゃないかと考えていました。バイトと同じ感覚で社会活動に関われるきっかけとして位置付ける、その実験をコミマでやってみるのも面白いと思いました。当日は、場所が目立たない所で、参加者が少なく、もっと、呼び込みの仕掛けをすればよかったかなという気がします。でも成果として出展団体間の交流が深まりました。

次回もまた学園祭のエコ化を継続してやりますが、その前に今回のECO学園祭の反省をやって、手順のマニュアル化を図りたいと考えています。あと今後は、環境に関する勉強会も重視していきたいですね。

1：NT21（新潟テレビ21）は2001年4月にTeam・Ecoを宣言し環境問題に取り組んできました。Team・Ecoは、エコロジーへの関心を高め、エコロジーの環を広げるため「今出来ること、身近な所から」をキーワードにスタートした環境キャンペーンです。NT21ホームページ <http://www.nt21.co.jp/index.html>より抜粋。
2：ボラバイトとはボランティアとアルバイトの中間的活動を表す造語です。お金が一番の目的ではなく、経験したことがない仕事を経験することや、地域の人たちとふれあうこと、学ぶことを目的として、人手を必要としているところに手伝いに行くことです。

代表者：村山貴規（農学部4年）
E-mail：saizeriyan@yahoo.co.jp
<http://groups.yahoo.co.jp/groups/saizeriyan/>



第1回 新潟大学ECO学園祭

環境にやさしい学園祭の実現を目指し、学園祭で出るゴミの減量化、再資源化を推進する企画です。単にゴミを分別するだけでなく、最終処分されて煙になるまで面倒を見るという視点をもっています。

- リサイクル容器の使用
- ゴミステーションの管理
- My箸キャンペーン
- 生ゴミの堆肥化

今までの活動の集大成としてECO学園祭を位置づけてみました。これをモデル化して他のイベントや学園祭にも転用できるように考えています。今後は県内のECO学園祭ネットワークづくりを推進していきたいと思っています。

今までの活動風景



3団体関係図



ゴミの分別処理。
 多くの方々に協力していただきました。



資源ゴミ回収業者への視察の様子。



回収した資源ゴミの計量をしています。



コミュニティマーケットで国ボラのブースを飾ったPRポスター。

新潟大学 国際ボランティア サークル

毎月3回ゼロのつく日に
留学生との交流会を行っています。

私たちの活動の柱は国際交流と国際支援です。まず国際交流で力を入れているのは留学生との交流。例えば毎月3回0（ゼロ）のつく日に行っているコーヒーアワーや、日本語教室があります。卒業生や地域の人から集めた家具や電化製品などを新しく来た留学生に安価で提供するウエルカムバザーも毎年春に1回行っています。

国際支援ではラオスの子どもや人々との交流や、現地のNGOの活動の見学をメインにしています。スタディツアーは行ける人が限られているし、お金も時間もかかるということもあっていかにコンスタントにやっていくかというのが課題ですね。

今回の新大祭では私たちもコミュニティマーケットに参加しました。いろんな団体の方がそれぞれの活動に対して熱い思いを持っていることが伝わってきて「ああ、すごいな」と素直に思いました。国ボラのメンバーが他の団体のブースで熱心に話を聞いている姿を見て、参加してよかったなと思いました。

私は本当に一人ひとりが楽しくやりがいを持って活動ができればいいなと思っています。新鮮な空気をどんどん入れて、止まらずに進んでいけたらいいなど。留学生の需要に対して私たちがちゃんとしたことができていくかというのも今後の課題です。留学生への広報もちゃんとできればいいなと思っています。まず、コーヒーアワーでも何でもいいので気軽に参加してみてください。



毎週水曜日の定例ミーティング後の憩いのひと時。

INTERVIEW



「一人ひとりが楽しくやりがいを持って活動ができればいいなと思っています」と語る前代表の吉岡真貴子さん（法学部3年）

代表者：芳賀理江（理学部2年）
E-mail：nukokubora@hotmail.com
<http://www.geocities.jp/nukokubora/>



世界中からアスリート（選手）が集まります。規模としては普通のオリンピックとたいして変わりません。

スペシャル オリンピックス

2005年2月の世界大会に向け 週末は事務局でボランティアです。

スペシャルオリンピックス（以下SO）とは、知的障害者にスポーツを通じて自立と社会参加を支援する組織です。

SOに関わるようになったのは、ドイツに語学留学に行った時に訪れた国際平和村の子どもたちを見て衝撃を受けたことがきっかけでした。そこでは戦争によって体に傷を受け、心にも大きな傷を持った子どもたちが治療を受けていました。その子どもたちの笑顔を見た時、日本人の子どもと何が違うのだろう？と思いました。その時、平和って何だろう、もっと考えなくてはと思いました。

日本に帰ってきて学部の掲示板に「スペシャルオリンピックス語学ボランティア募集」とありました。それでボランティアの申込みをしました。

毎週金曜日に「ほがらか園」という知的障害者の作業施設にボランティアに行っていて、そこがSOの事務局になっています。「ほがらか園」の活動をメインにしていますが、SOの週末ボランティアも楽しくやっています。そこでは、ポウリングとバスケットをやっています。

今後の抱負としては、多くの人にSOを知ってもらって、彼らと接することによって何かを見つけてほしいということです。いい人間性というか、さらにいい生き方が見つかるように思います。

そして今、SOでは、ボランティアを募集しています。緊張せずに来て下さい。みんな笑顔で迎えてくれます。HP（<http://www.sonniigata.com>）もありますので、1度申込んでみて下さい。

代表者：波多野創（理学部3年）



一食の中で当日ブースを借りてもらって広報活動をしました。

INTERVIEW



「多くの人にボランティアに来てもらいたいです。1度でいいので是非来てみて下さい！」と語る波多野創さん（理学部3年）

スペシャルオリンピックスは、知的発達障害のある人たちに、日常的なスポーツトレーニングと、その成果の発表の場である競技会を、年間を通じて提供し、社会参加を応援する国際的なスポーツ組織。日本では1980年に導入され、1994年には国内本部「スペシャルオリンピックス日本」が、スペシャルオリンピックス国際本部の認証を受けて発足。2001年5月にはNPO法人の認証を受けた。

コミュニティマーケット会場の横で、
無農薬の野菜等を販売している
「まめっこ」というサークルを見つけました。



夏休みに松代町で合宿。収穫した枝豆で夜は飲み会。



新大祭では縁農村の農家さんの
野菜やおにぎりを販売しました。



主婦や学生にも大人気でした。

INTERVIEW



「今後の活動話し合う時はみんなマジメです」
片野奈緒美さん(農学部3年) 吉田英二さん(大学院自然研M2年)
上野聡子さん(大学院自然研M2年) 坂倉啓介さん(農学部2年)
宮内あゆみさん(農学部2年)

まめっこ

地域に出かけていき、
農や食について学んでいます。

まめっこを上げたのは、縁農村という生産者と消費者が交流しながら農と食を考えている市民団体に学生が関わり始めたことがきっかけでした。学生で縁農村の活動に関わる人が増えていき、サークルをつくり、学生の視点で活動をしてみようとなりました。

サークルの理念は、大学からとびだし、地域に出かけていって、いろいろな人と出会い、いい影響を受け、農や食について考えを深めていくことです。地域の方々の考えを聞いたり、姿を見たり、いろんなものに触れたりする中で、深い学びも得られるし、自分の考え方や生き方というのを見つけられると感じています。

現在は、まだ立上げて一年も経たないので、農学部の学生がほとんどですが、農と食は切れないものなので、他の学部の人にも体験してもらって考えるきっかけになればいいです。

活動の一つとして、6月に縁農村の農家、小柳さんのトマトを新大の学生食堂で販売しました。普通より甘いトマトで、5日間各食堂で売りました。けっこう人気だったみたいで、毎日買ってくれる学生もいました。当初は学生食堂で無農薬野菜を使った料理はできないかと考えていたのですが、今のところは進んでいません。

今後は、勉強会を開き、サークル内で農や食について深めるとともに、他の学生がもっと食や農に対して興味をもてるようなきっかけづくりもしていきたいです。また、大学の授業で農家と学生・教授との交流や情報交換ができればいいなと考えています。農家と大学の交流が生まれ、学生たちがもっと農業に興味をもってくれればいいですね。

代表者：片野奈緒美(農学部3年)

震災ボランティア 新大本部

ボランティア活動を希望する学生の
相談にのっています。

震災ボランティア新大本部は、学生が被災地の方々の力になれないかということで、7・13水害でボランティアをした人たちが集まって立ち上げようと話し合ったことがきっかけです。その後は、大学に理解、努力していただき学生生活支援課内（総合教育研究棟1階）に本部が立ち上がりました。

初めは、大学のいろんなところにスタッフ募集の張り紙をしました。現在スタッフとして活動している学生は103名います。

空いている時間に本部に来て、各地のボランティアセンターと連絡を取ったり、ボランティアに行きたいという学生の相談にのったり、交通手段のナビゲートをしたりしています。

最近は新しく学生にできるプロジェクトということで、ペンフレンド（1）、出張家庭教師、段ボールマイスター（2）をしています。あとチャリティコンサートやバザー、放課後の寺子屋などの企画も始まっています。

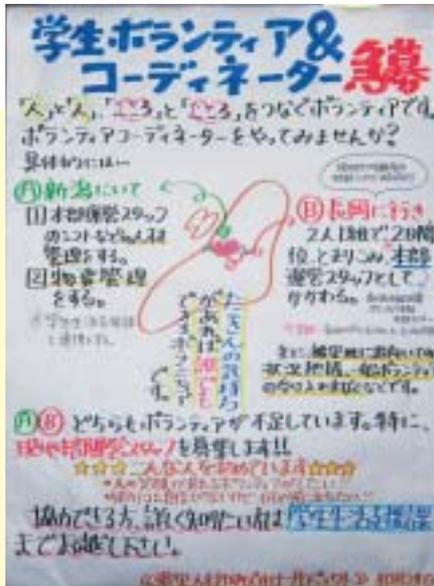
被災地の方々は、精神的な面でストレスがたまっているので、ボランティアセンターが閉まった後も心のケアをしていきたいです。実際できることは限られていますが、少しでも心のケアになればいいなと様々な企画を進めています。長期的な支援は、時間に余裕のある学生の見せ場かなと思っています。

また、コミュニティマーケットを機に、国際情報大学のn-VIC新潟ボランティア情報センターの学生ともつながりができ、新大のリサイクル弁当箱会や国際ボランティアサークルの人たちにも加わってもらい、ミーティングをしています。その中で、n-VIC新潟ボランティア情報センターが主体になって開催するチャリティコンサートを、支援していくという動きもあります。

今後は、ニュースなどの報道も少なくなり、ボランティアの熱も下がると思うので、中越地震のことを忘れさせない息の長い活動をしていきたいです。

TEL : 080-3320-6658
E-mail : gakuserv@adm.niigata-u.ac.jp

- 1 登録してくれた、主にお年寄りや子どもたちと、手紙を交換する活動。メンタルケアの1つとして位置付けている。
- 2 強化段ボールを使って家具を製作し、避難所や仮設住宅で役立ててもらおうという活動。家具を作るという目的以外にも子どもたちの遊びの1つとしても考え、実施している。



手づくりの募集ポスター。

ダンボールで作った机、引き出し、おもちゃ...などなど。

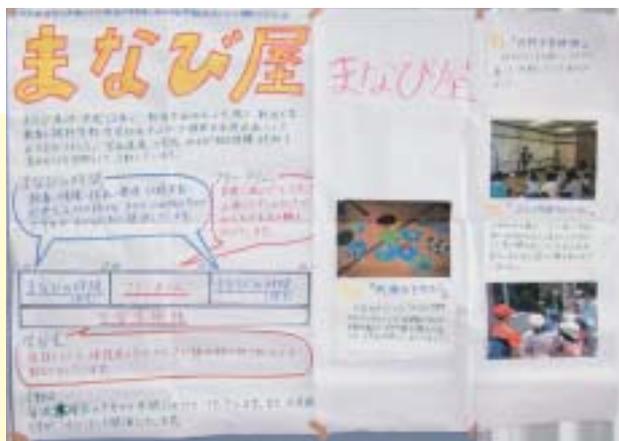


「自分たちに何ができるか？」を話し合っている風景。

INTERVIEW

震災ボランティア新大本部受付でインタビュー。お話ししてくれたのは、服部祥平さん（理学部4年）、浦山亜希人さん（人文学部4年）、南雲郁美さん（教育人間科学部3年）





西地区公民館に掲示してある、まなび屋の活動紹介です。



まなびの時間の様子。この日は、「職業について」学びました。

INTERVIEW



「もっといろんなところに出て行って活動の幅を広げていきたいです」と語る水上雄太さん（教育人間科学部2年）

地域教育実践研究事業

まなび屋

学校では学ぶことのできない「まなび」を子どもたちに提供しています。

「まなび屋」は公民館にくる子どもたちに学校以外で学べることを教えてあげられたらいいね、という思いから始まりました。最初は参加する子どもたちは3～4人くらいで、スタッフも多くはなかったです。スタッフの多くは教育人間科学部ですが、農学部や医学部のスタッフも何人かいます。活動を続けているうちに、公民館の方とのつながりや地域の方とのふれあいが生まれてきました。

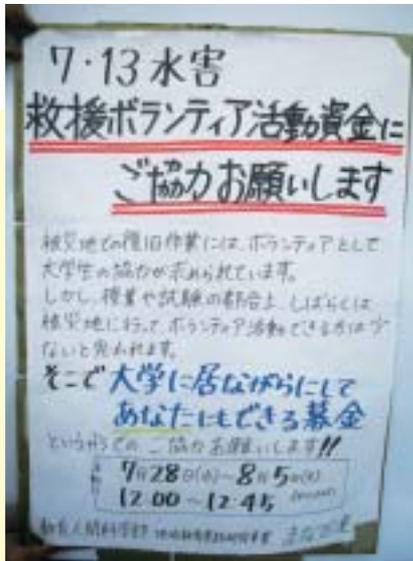
活動はまなびの時間という内容と、毎週木曜日にゲームをしてふれあうフリータイムとで構成されています。まなびの時間では、学生スタッフや地域の方々を講師として、普段学校では学ぶことのないような「まなび」を子どもたちに提供するといった内容になっています。

毎年、4～5月に、球根栽培の為につんだチューリップの花をボードにさして絵を作り、それを飾る「花絵」というイベントを行っています。ただ子どもたちと一緒にやっているだけでなく、外部からの見学者と交流をもって、そこからつながりが生まれて、スタッフ自身が外へ出ていききっかけにもなっています。

コミマは「まなび屋」をアピールする大切な機会でした。いろいろな団体の方と知り合いになって自分たちの活動に生かすきっかけにもなりました。

組織が大きくなって同じ活動を続けていると、どうしても新しいことに挑戦しなくなります。今までの公民館でやっていたことだけにとらわれないで、もっといろんなところに出て行って多くの活動に携わっていければいいと思っています。

代表者：水上雄太（教育人間科学部2年）
西地区公民館（活動場所）
TEL：025-261-0031
E-mail：nishi.co@city.niigata.lg.jp



炎天下、この看板を掲げて呼びかけました。総額161,342円。ご協力ありがとうございました。

7・13水害における まなび屋の活動

募金活動と三条の小学校への出張まなび屋でした。

7・13水害の際、まなび屋が活動したことは、主に募金活動と三条での出張まなび屋です。

募金活動は、現地ボランティアに行き、ショックを受けたことがきっかけでした。大学に戻ってから、ここで講義を聞いている場合じゃないともどかしさを感じ、現地に行かなくてもできる募金を大学全体に呼びかけることにしました。

並行して、まなび屋で募金活動をしてくれる人を呼びかけたら、大賛成、協力するよと言ってくれたので、うれしかったです。まなび屋のみんなの力を借りて、実行に移せました。募金活動をしていると、そのまま素通りする人もいれば、「ご苦労様、熱中症で倒れないでね。」と声をかけてくれる人もいました。

もう一つの活動は、出張まなび屋です。水害後、遊んでいる子どもの姿が見えないことに気づき、被災地の子どもの居場所づくりをしようと一人のスタッフが声をあげました。

唯一、三条市立月岡小学校が体育館もプールも被害がないということで、校長先生にお願いしました。校長先生をはじめとして、先生方が協力してくださり、水中運動会と体育館での遊びが3回できました。子どもたちは、毎回100人近く集まってきて、久しぶりに友達とプールに入れてとても楽しそうでした。

終了後、スタッフの中で、3回で終わらせるのではなく、冬休みや春休みもやりたいという話がありました。まだ実現していませんが、いつかできたらいいなという夢はあります。

7・13水害のとき、私は、情報をたくさん持っている人とつながりがあったから一歩を踏み出せました。中越地震が起き、大学の中に相談する所があったら、そこから情報を提供して、他の学生も大きな一歩を踏み出せるんじゃないかと考え、震災ボランティア新大本部の立ち上げに関わりました。震災ボランティア新大本部が学生による学生のための相談窓口として、うまく機能していけたらいいですね。

ジャンケン箇所やぶり。お兄さんに勝てるかな。このほかいろんなゲームをしました。



久しぶりのプール。とっても気持ちよさそう！子どもたちははじける笑顔が見られました。

INTERVIEW



「情報をたくさん持っている人とつながりがあったから一歩を踏み出せました」と語る大滝優果さん（教育人間科学部3年）

「7.13水害における新潟大学の支援活動」

学生・教職員が参加

7月13日(火)三条市、中之島町などに集中豪雨による災害が発生した。

新潟大学では、災害復旧に多数の救援活動が必要とされていることから、まず各学生サークルのリーダーにボランティアを呼びかけるため、7月15日(木)の学友会委員会で、災害救援ボランティアへの積極的な参加についてお願いしたところ、7月16日から21日にかけて50人を超える学生が参加した。

7月20日(火)には「災害救援ボランティアの募集について」が新潟県災害救援ボランティア本部から依頼があり、大学として積極的に災害救援ボランティアを支援することを受けて、7月22日(木)に「災害救援ボランティア募集中」の掲示を行って、学生の参加を呼びかけ、7月22日(木)、23日(金)、26日(月)～30日(金)の7日間で延べ283人の学生・教職員が参加した。なお、現地までの交通手段として大学のバス等を用意し、同ボランティア本部からの指示により、三条市において災害救援ボランティア活動に参加した。

ボランティアに参加する学生・教職員の活動内容は、現地のボランティアセンターで各自が作業を見つけることから始まり、作業現場では、家庭内の清掃、家具の搬出、ゴミ搬出、泥出し・泥上げなどに従事したが、災害後の連日の猛暑のため、参加者全員は悪臭、粉塵に余儀なくされ、真っ黒に日焼けし、疲労の色が隠せない者もいたが、参加者の顔はボラ

ンティア活動をやり遂げた充実感に満ち溢れ、また是非参加したいと感想を語り合っていた。ただ、被害の状況は、予想を遙かに上回るほどひどく、ボランティア活動の重要性を一人一人が痛感した。

また、7月22日に参加した者の内、工学部教員2人とともに学生32人、自然科学研究科学生4人は、授業のため栃尾市に行く予定であったが急遽、ボランティア活動に切り替えて参加した。

その他、現地でのボランティア活動以外にも、学内サークルが大学構内で募金活動を行ったり、市民団体が街頭で行っている募金活動に学生個人として参加するなど、今回の災害を契機に、一人一人が自分のできることを見つけ、ボランティア活動に参加する姿を随所で見ることができた。

また、現地でのボランティア活動以外にも、医学部医学科や歯医学総合病院では、災害医療救護活動のため医師・看護師を派遣した。

以上により、救援活動に参加した学生・教職員は、休日を中心とした個人での参加等を加えると700人を超える数が確認された。

さらに、本学では、学長、理事、部局長等が呼びかけ人となり、教職員に対して、今回の豪雨水害により被災された方々に対するお見舞いとして「義援金」の募集を7月28日(水)から8月31日(火)まで行い、新潟県へ贈呈した。



三条市立条南小学校に到着。作業の指示を受けた後、プールの清掃作業を行った。



第53回関東甲信越大学体育大会

今大会は、都留文科大学が新たに加わって13大学約5,700人の学生・教職員が参加し、主管校の長岡技術科学大学、信州大学及び本学の3大学を当番校として8月11日から9月5日までの日程で実施されました。

本学からは、約300人の選手が空手を除く16種目(ただし、バドミントン女子は、不参加。)に参加しました。種目別成績は、次表のとおり。

なお、本学が担当した7種目については、顧問教員を始め、関係部員・マネージャーが中心となって大会運営を行うとともに、養護教諭特別別科の学生が、救護員として各会場に待機するなど、多くの皆さんから多大なご協力をいただきました。

大会当日は、試合中のけが人の対応や、硬式野球の日程が雨天順延になるなど、様々なハプニングもありましたが、無事大会を行うことができました。



当番大学	競技種目		成績			備考
			優勝	準優勝	第3位	
長岡技術科学大学・主管	A	テニス 男	宇都宮大学	新潟大学	茨城県立大学	
		テニス 女	茨城大学	横浜市立大学	新潟大学	
		水泳 男女	新潟大学	埼玉大学	群馬大学	
信州大学	B	弓道 男	千葉大学	埼玉大学	信州大学	2年連続優勝
		弓道 女	千葉大学	横浜市立大学	筑波大学	2年連続優勝
	標準硬式野球	A	筑波大学	千葉大学	群馬大学	
		B	横浜国立大学	山梨大学	都留文科大学	6年連続優勝
	ラグビー	C	筑波大学	横浜市立大学	群馬大学	9年連続優勝
		体操 男	筑波大学	埼玉大学	新潟大学	19年連続優勝
	柔道	女	山梨大学	新潟大学	茨城大学	4年連続優勝
		バレーボール 男	筑波大学	山梨大学	宇都宮大学	2年連続優勝
	バドミントン	女	宇都宮大学	新潟大学	山梨大学	
		空手 防具組手	千葉大学	埼玉大学	宇都宮大学	2年連続優勝
新潟大学	C	空手 自由組手	筑波大学	千葉大学	山梨大学	4年連続優勝
		陸上競技 男	信州大学	山梨大学	群馬大学	26年連続優勝
	ソフトテニス	女	筑波大学	都留文科大学	横浜国立大学	19年連続優勝
		女	群馬大学	埼玉大学	都留文科大学	
	バスケットボール	男	群馬大学	宇都宮大学	新潟大学	
		女	信州大学	横浜国立大学	筑波大学	3年連続優勝
	剣道	男	信州大学	埼玉大学	新潟大学	7年連続優勝
		女	茨城大学	新潟大学	埼玉大学	
	卓球	男	茨城大学	新潟大学	埼玉大学	
		女	新潟大学	信州大学	群馬大学	5年連続優勝
硬式野球		新潟大学	茨城大学	群馬大学	8年連続優勝	
サッカー		筑波大学	横浜市立大学	茨城大学	3年連続優勝	
			宇都宮大学	群馬大学	8年連続優勝	

大学院保健学研究科保健学専攻修士課程

看護学、放射線技術科学、検査技術科学の分野において
高度な知識と技術を有する専門家の育成を目指して

大学院保健学研究科保健学専攻修士課程は、看護学、放射線技術科学、検査技術科学の各分野において、(1) 高度の専門知識と技術を有する人材の育成、(2) 管理実践能力を有し指導的立場で活躍できる人材の育成、(3) 国際協力に積極的に取り組む人材の育成、(4) 保健学の将来を担う教育・研究者の育成、を教育目標として、2004年4月に設置されました。

保健学専攻は、看護学、放射線技術科学、検査技術科学の3分野からなり、定員はそれぞれ10名、5名、5名で計20名です。看護学分野は基礎・広域看護学と応用・臨床看護学の2領域、放射線技術科学分野は応用放射線科学と放射線診療技術科学の2領域、また、検査技術科学分野は基礎生体情報検査科学と臨床生体情報検査科学の2領域から構成されています。

このように、1専攻3分野とすることにより、3分野が1つの単位となって、共通科目を分担する一方、研究指導面においても相互に協力し、教育の幅と深さを増す上で効果的な組織と考えています。特に、放射線技術科学と検査技術科学においては、医学・理学・工学の技術を応用する医療技術科という点で、共通の性格を併せ持っており、両者を1つの学問体系として位置づけることに

より、新たな教育・研究分野を開拓することも可能と考えられます。3分野での密接な連携と協力は、臨床の場でのチーム医療を構築する上での礎になるものと期待されます。また、保健学研究科は医歯学総合研究科ならびに医歯学総合病院と相互協力することにより、教育・研究面において更なる成果を上げることができると考えられます。

現在、保健学研究科保健学専攻には看護学分野20名、放射線技術科学分野10名、検査技術科学分野5名の1年次学生が学んでおり、各自研究テーマを絞って熱心に特別研究に取り組んでいます。高度な知識と技術を有する専門家として国内外で社会に貢献することを考えている学生、教育者・研究者になるべく精力的に研究に打ち込んでいる学生などが集い、保健学研究科は活気に満ちています。このような学生たちの中で保健学の領域にさらなる興味を持つ人が各自の研究を発展的に継続してゆくためにも、現在、医学部保健学科、保健学研究科保健学専攻においては、2006年4月に大学院保健学研究科保健学専攻博士課程を設置すべく、教職員一丸となって取り組んでおります。

(高橋益廣)



新潟大学歯学部 口腔生命福祉学科

「口腔（こうくう）」・「食べること」の視点から
要介護者・障害者のQOLを追求できる人材の育成を目指して

新潟大学歯学部口腔生命福祉学科はむし歯や歯周病などの病気を予防し、口腔（こうくう）の健康を守る専門家である「歯科衛生士」を養成する学校としては全国初の4年制大学課程として2004年4月に開設されました（入学定員20名）。また、口腔生命福祉学科では「歯科衛生士」とあわせて、障害者や要介護の方などに対して、福祉全般に関する相談や助言・指導などの援助を行うことを専門とする「社会福祉士」という、歯科医療および福祉に関する二つの国家資格の受験資格が得られるという世界的にも例のないユニークなカリキュラムを構築しています。

現在、我が国では超高齢社会を迎え、これに伴い介護を必要とされる方が今後急速に増加していくことが予想されています。一方で、年金・医療・介護などの社会保障費用は急速に増大しており、このままでは社会保障制度自体が破綻してしまう恐れが生じているため、要介護者の機能回復（リハビリテーション）を支援し、要介護度の重度化を防止するとともに、要介護状態となることそのものを予防する介護予防が緊急の課題となっています。

要介護高齢者の方では、お口の清潔の不良から誤嚥性肺炎（口の中の細菌を含んだ唾液や食べかすが誤って気管に入ることによって起こる肺炎）を起こし、要介護度の重度化や死亡

に繋がるケースが多いことが明らかになり、介護予防の重要な柱としてお口のケアが取り上げられるようになってきました。

また、介護の3大基本要素は「食事」、「排泄」、「入浴」ですが、「食事」介護は栄養摂取や食べる楽しみといった要介護者の生命維持や生きがいの確保に最も重要な役割を果たしているにもかかわらず、全身や口の中の状態、食べ物の性状、介助の仕方などが複雑にからみあって一人ひとりの対応が異なり、誤嚥（ごえん：誤って気管に食べ物などが入ってしまうこと）や窒息の危険がつきまとうなど、高度な知識・技術と医師、歯科医師、栄養士、調理師、介護士など様々な保健・医療・福祉関係者の連携が必要な分野であるために、十分な対応がなされているとは言えませんでした。

このため、口腔生命福祉学科では「口腔ケアや食べること（摂食嚥下）に対する高度な専門知識を有しつつ、要介護者・障害者やその家族の立場になって保健・医療・福祉を総合的に考え、マネジメントできる専門家を養成する」ことにより、要介護者・障害者などが真に必要な適切な保健・医療・福祉サービスを総合的に受けられるようにし、これらの方の健康と生活の質（Quality Of Life）を確保することを目指しています。

（大内章嗣）



たばこの話

保健管理センター 助教授
青木 定夫

最近たばこの害についての声が大きくなっています。航空機では、国際線さえも全席禁煙がほとんどになっていますし、国内線ではいうまでもありません。新幹線でもかつては車両の片隅に追いやられていた禁煙車両が増えて、逆に喫煙席を探すことが必要になっています。レストランでは禁煙席を設けるのが普通になっていますし、ラーメン屋さんでも昼食時は禁煙という店があります。ようやく、禁煙、分煙に社会が力を入れて取り組み始めました。これは、2003年5月に施行された健康増進法の規定により、「学校、体育館、病院、劇場、観覧場、集会場、展示場、百貨店、事務所、官公庁施設、飲食店その他の多数の者が利用する施設を管理する者は、これらを利用する者について、受動喫煙（室内又はこれに準ずる環境において、他人のたばこの煙を吸わされることをいう。）を防止するために必要な措置を講ずるように努めなければならない。」（同法第25条）とされたことが大きいですが、これにかぎらず受動喫煙の害が声高に叫ばれるようになったためでもあります。

JT（日本たばこ産業）が毎年行っているたばこを吸う人の割合の調査の2004年の結果が公表されています。それによりますと、成人でたばこを吸う人の割合は2004年6月時点で、前年比0.9ポイント減の29.4%と、9年連続で過去最低を更新し、初めて30%を割り込んだそうです。この統計は1965年に取り始められ、今回の調査は全国の男女計1万6000人を対象に行い、1万875人（68.0%）から回答を得たそうです。男女別では、男性が前年比1.4ポイント減の46.9%と13年連続減少、女性は0.4ポイント減の13.2%で3年連続減少したということです。最近5年間の喫煙率の推移を図に示します。女性にくらべて男性で喫煙者が大きく減っているように思われます。この統計を基に喫煙者人口を推計すると、男性が前年比59万人減の2328万人、女性が17万人減の704万人になります。年齢別に見ると、喫煙者率が最も高かったのは男女とも30代で、男性が56.3%、女性が21.3%。地域別では男女とも北海道が最も高かったそうです。また、「毎日吸う」と回答した人の1日平均の喫煙本数は、男性が22.4本（前年比0.5本減）、女性が16.5本（同0.7本減）だったということです。JTは喫煙者の減少について「健康に関する意識が高まり、喫煙をめぐる規制の強化や、一昨年7月のたばこ税の増税実施などが影響しているのではないかと」しています。

狂牛病問題で米国からの牛肉の輸入が禁止されています。かぎりなくリスクをゼロにするという努力はもちろん必要ですが、専門家によれば、この禁止を解いても狂牛病の発症が統計学的に増えるということはないそうです（ある牛肉が安全かどうか

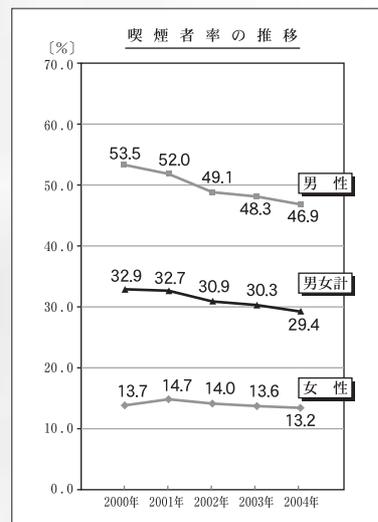
とは別次元のお話です＝念のため）、ところが、たばこの害によって、わが国で命を落としている人は年間1万人以上もいるのです。これは交通事故による死者に匹敵するかそれを上回る数字なのです。

牛肉を食べて難病にかかる危険より、たばこを吸うこと、たばこを吸う人の煙を吸い込むことによってさまざまな病気にかかる危険のほうがずっと大きいのです。たばこを吸っても全員が病気になるわけではないとは、喫煙者からよく聞く言葉ですが、そのリスクは無視できないほど高いことを認識すべきだと思います。

キャンパス内も禁煙化の波は進んでいます。喫煙者の権利を守るべきだという声も聞かれますが、少なくとも他人に危険を与えない義務があります。厚生労働省の「職場における喫煙対策のためのガイドライン」（2003年5月）では、分煙として喫煙室等を設ける場合には、『非喫煙室にたばこの煙が漏れないこと』、『たばこの煙が拡散する前に屋外に排出する設備をもうけること』、『喫煙室から非喫煙場所の境界において喫煙室に向かう気流が0.2m/s以上になるようにすること』が示されています。

たばこは、個人のためにも、家庭のためにも、社会のためにも、やめるべきものと認識しましょう。また、学生のみなさんは、決して新しく吸い始めることのないようにしてください。禁煙の努力をしてもなかなかやめられない人、それはあなたの意志が弱いのではなくて、ニコチン中毒という病気なのです。正しい指導の下で、かならずやめることができます。

たばこでお悩みのかた、保健管理センターにご相談ください。



保健管理センター【五十嵐地区】

Tel.025-262-6244 Fax.025-262-7517

旭町分室【旭町地区】

Tel.025-227-2040 Fax.025-227-0748

利用時間 / 8:30 ~ 17:00 (土・日曜、休日は除く)

こちら就職部

● **就職部では、こんな就職支援を行っていますので、どうぞご利用ください！**

就職相談の実施

就職に関することは、どんなことでも相談に応じています。いつでも相談に来てください。また、学外から、企業の採用担当経験者である専門家を招いて、個人・集団別に定期的に就職相談や面接指導を行っています。

主な就職支援事業

就職部では、様々な就職支援事業を計画し、実施の際は、その都度、掲示・HP・メール等でお知らせしています。皆さんの積極的な参加を待っています。

8・9月	キャリアインターンシップ
9月下旬	全学就職総合ガイダンス（出陣式）
10月上旬	セミナー「就職のためのインターネット活用方法」
11月上旬	キャリアを考えるシンポジウム
12月上旬	首都圏企業学内合同説明会
12月中旬	官公庁等学内合同説明会
1月中旬	マナー講座
1月中旬	内定者セミナー
2月中旬	県内企業学内合同説明会
2月下旬	公開模擬面接会

各種模擬試験や講座の実施

- ・公務員採用試験対策講座・模擬試験、教員採用試験対策講座・模擬試験
- ・R-CAP公開テスト、一般常識模擬試験
- ・Web型就職支援ツール「E Testing」

メールによる就職情報提供

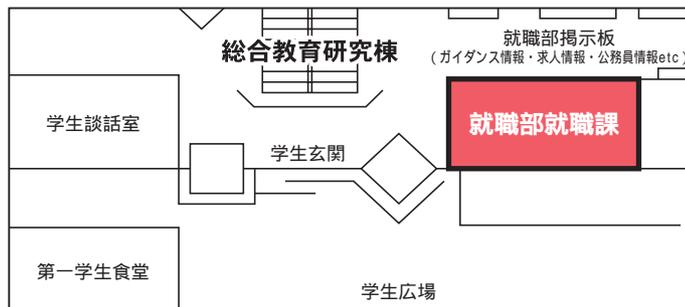
学生のみなさんに大学から配付されている電子メールアドレスに就職情報（求人情報、ガイダンス日程、説明会情報等）を随時配信しています。

東海大学との就職支援提携

新潟大学就職部は、東海大学と就職支援提携を結んでいます。これにより、本学の学生は首都圏の就職情報・求人情報を東海大学で入手することができます。また、就職活動の際、東海大学の宿舎を利用することができます。

● **就職部はここです！そしてこんなところです。**

就職部はここです。就職部では、パソコンコーナー、就職対策本・求人票やパンフレットなど各種資料を整え、本学で開催したセミナー等のビデオ視聴コーナーも用意していますので、参加できなかったものをゆっくり見ることができます。お気軽においでください！



就職部就職課

TEL: 025-262-6531, 6087, 7889 FAX: 025-262-7579

E-mail: shushoku@adm.niigata-u.ac.jp

利用時間 9:00~17:00 (土日、休日は除く)